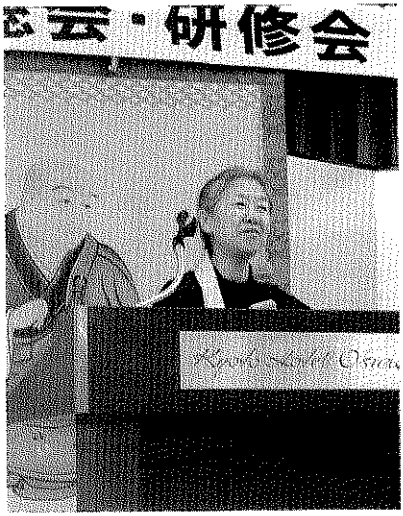
難しい青少年教化を考える

教えるのではなく同行人に

三橋尚伸氏（真宗大谷派）の講演から



浄土宗近畿地区児童教化連盟は23日、研修会を行い、真宗大谷派の僧侶で、産業カウンセラーの三橋尚伸氏が、「指導者から同行人へという関わり方～児童・青少年教化が出来ない理由を再考する」と題し講演した。

初めに三橋氏は、「子どもを教化するのは難しい。子どもを教化するには、まず大人の檀信徒から信頼されなければいけない」と指摘。世間の仏教に対する視線の厳しさを述べた上で、「寺院・僧侶には、いかに自分のことを分かってくれているかを相手に感じてもらえる、カウンセリングマインドが必要」と語った。カウンセラーの現場で使う、人生から作られる考え方、感じ方の枠組みである「準拠枠」を用いて説明。カウンセラーが相手の感じている準拠枠に入り、その人の話を聞いていくことが大切とした。人が話を聞くときには、事柄、感情、意味の三つの段階があり、大半の人は事柄は聞けるが、カウンセラーは感情も聞くことができる。しかし意味は答えのない問いであり、「スピリチュアル・ペイン」に応えられるのは宗教者だけだと述べた。

意味への求めに「答え」ようとするのではなく、「応える」ことが大事とし、「お釈迦さまもイエス・キリストも、実は『応じる』ということをしている。応じる側は相手が主人公の『同行人』、付き添い人になることが大事」と話した。

そのために僧侶に必要なこととして、守秘義務を遵守すること、個人を尊重し、世間と同じように十把ひとからげにしないこと、自分の声や態度にもっと意識を向けて、自分から出ているメッセージを自覚することの3点を挙げた。

また、特に非言語コミュニケーションの重要性を指摘した。言葉と表情に矛盾がある場合の人の受け止め方は、言語情報は7％しか占めない。この「メラビアンの法則」を使って説明し、参加者が普段どのような態度で話を聞いているのかを会場で実際に行い、確認した。

まとめとして三橋氏は、「四摂法」を実践することが教化につながると解説。〝同事〟で相手の心になって考える。〝愛語〟で優しい言葉をかける。〝布施〟では何を捧げられるかを考える。少なくとも僧侶は、相手のためにどれだけ自分の時間を捧げられるかを考える。〝利行〟は、自分は何をもらえているかを考える。「我々は凡夫であり、凡夫は頂き物がないと続かない。私がもらって一番うれしかったのは、『救われた』という言葉だった」と締めくくった。